

香 蘭

香 蘭

2019年(平成31年)3月号
第96巻 第3号 通巻1059号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(43)	相川 公子	表二
作品一特選(三月号)	松井・石井・横山・西野・高橋(登)・伊藤(美)・坪・朝香・水本	2
作品二・三特選(二月号)	江口・牧田・中村(か)・松沢・杉山(ま)・西・武藤・水谷・安田・竹本・木村・庄司	4
作 品		6
一		6
二		22
三		30
推薦香蘭集		38
香 蘭 集		39
村野次郎への旅(108)		20
転載「第一歌集の頃」	千々和 久幸	37
焦 点(二月号) 新・旧の風俗を拾う	千々和 久幸	44
作品一特選欄評(二月号)	丸山 三枝子	46
作 品 評(二月号) 作品一	坪山 正裕	48
作品二	山下 紘子	50
作品三	青山 侑市	52
香蘭集	土井 紘二郎	54
緑 地 帯	長野・中井・篠永・田淵	56
明宝研究会第一〇二回十二月例会	編集部・河野 慎二	59
七首抄(一月号)	浜・武藤・関(哲)・小原	66
他誌拝見 99	城 富貴美	67
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動き	佐藤 弓生	71
転載 桜井京子歌集『超高層の憂鬱』評		75
歌会及び会合・会員消息・他		75
編集後記		79
2019年度 香蘭短歌会全国大会	申込書・詠草記入用紙	81
2019年度 香蘭短歌会全国大会のご案内		81
表紙絵	中村 陽子「鏡を置けば」	表三
目次カット		和 田 和 雄



2019年(平成31年)3月号

第 96 巻

第 3 号

通巻 1059 号

うすぐらき梁につるしし鮭ひとつ年を

越えつつ塩ふきにけり

この作品は歌集『夕あかり』の中に収められている一首です。昭和十一年代の作ですが、その当時、農村地帯に生まれた私には、感慨深い歌です。

国民学校二年生で終戦を迎えた私の記憶では、当時の農村地帯は終戦直後だからだけではなく、殆んど自給自足のつましい暮らしでした。そんな日々の中でのお正月は子供にとっては大変な楽しみでした。大晦日になると大人は大掃除をし、神棚を清めお供え物を飾って年神様を迎える用意をしました。お供え物の中で塩引鮭は不可欠な物のひとつでした。そして神様の御下がりでもあり、日常的には口に出さない鮭を、人々は大切に食べたのです。

この歌は当時のつましく、句読点のある懐かしい暮らしを思い出させてくれました。

『夕あかり』197頁、『村野次郎三百首』には収録されていない。

『夕あかり』

四 選 者 の 作 品

百年ののち 平塚 千々和 久 幸

新宿に「香蘭」なる結社のありにきと百年ののち誰か語らん
結社誌の受難の時代と嘆きたる先達の誰も生きてはおらず
急ぎ働きは鬼平犯科帳わが歌も急ぎ働きと言わば言うべし
負けて勝つことなど俺には出来ぬわさ 落葉が何か言うに振り向く
壮年期とうに過ぎしよ汲む酒のどれもが舌に甘くなりきつ
身の上は知らずともよし悲しみの深ければなお明るく笑う
近況のはしばしに顔の浮かびきてわが友はみな良き妻持てり
街路樹の落葉濡れしを踏みてゆく病棟にいる妻に会うため

銀の蒼 鎌倉 香山 静子

年末に拭きゆく広き窓に見ゆ白木蓮の銀の蒼が
創業数十年を誇りとしてみし饅頭屋が平成最後の年に閉ちたり
まざまざと歳を知らざる階段を駈けあがらんとして願けるとき
後部座席の女性数人の会話など聞きつつゆらる横須賀線に
ピルの間の三角形の夕空に月が傾く窮屈さうに
あの人死んでしまった古里の野辺に採りたるグスベリの実よ

ひとりなる部屋にも南天ひと枝を飾りて小さな初春を呼ぶ
元日がわが生日といふ自覚湧かずに参拝の列に加はる

観潮楼 我孫子 丸山 三枝子

口髭は上になびきて胸像の鵜外しずか観潮楼に
鵜外をつまびらかなる年譜追う 六十年の一年一年
親交のありし明治の文豪のなかんずく白秋の筆跡
鵜外となりゆく軌跡たどりきて岩見人森林太郎に帰す
観潮楼二階より見る(三人冗語)の石たいらなり鵜外の庭
観潮楼の窓の借景 左端の第八中学校は房子さんの母校
観潮楼の門を後方に眺めおり窮屈そうなスカイツリーを
鵜外のゆかりのホテルにわれら四人はなし弾みてランチ平らぐ

姑さま 東京 桜井 京子

ネズミモチに藤蔓あつく絡みつきながき縁になつたのだらう
意識なく点滴もせず姑さまは四日生きたり最期はしづか
ひかりつつ穂祭とぶ日よ姑さまが逝つてしまつて人が集まる
実生なる柚子がたくさんこの秋も生つてあるなり大馬鹿の柚子
頑張つてがんばりぬいて力尽き出なくなりたりポールペンの赤
枝ぶりを見上げてをれば一人来てまた一人来て樹はかがやけり
暮れ方の空のかなたを輝かす羊雲なりおしよせて来る
退屈なわれのひと日は暮れてゆきゴドーとならび空を見る日よ

作品一特選



(三月号作品、五選者共選)

偲ぶ会にて

横浜 松井芳子

霊園行きバス停目指して駅前を迷ひ迷ひぬ現世のわれ
 西澤さんの御霊に会はむと行く道に蜜柑は稔り黄に溢れたり
 墓前には福集室に見馴れたる湯呑みにお水を供へてありぬ
 現世の続きを歩む君ならむ墓誌に俗名太々とあり
 墓参終へてさざめくわれ等の一群に紛れています君を想へり
 指導力気力体力香蘭に捧げ尽くして君は逝きたり
 あちこちと補聴器さがして何分かあるべき耳に付いてをりたり
 晩年 習志野 石井雅子

人生の時間がほろほろ零れゆき晩年といふ水溜まりあり
 記憶とは捏造されるものらしい彼と彼女の話しちがふ
 矢を受けて立往生の弁慶のごとき女優の謝罪会見

医師の言ふ命の期限ゆつくりとわたしの裡にしまひこみたり
 少しづつ狂ひが生じてゆく体 肝腎要の肝臓病みて
 一年は短いけれど一日は長いと男ら日だまりの中
 髪染と言ふほどでなくしゃやくしゃと生きてみますと便りをくれぬ
 「チコちゃん」の声 宇都宮 横山慎夫

日に幾度かほーつと空を見てる時耳元に聞くチコちゃんの声
 難しいことは知らねとおおよそのことは承知ぞカルロスゴーン
 うきうきと王様気分披露宴ベルサイユ宮殿貸し切るゴーン
 使い切れない金があつてもまだ欲しい笑つてしまふへの字の眉毛に
 日産の監査法人は日産から監査報酬を得るとう仕組み
 きつとくる必ず来ると思つてたボケやさ庭のツワブキの花
 六十二円の切手で封書を出したから十月十日はボケし記念日
 ほんとかな 東京 西野 美智代

折を見て話し合はんと言ひながらうちなんちゆの胸に土砂を被せる
 制服に枯草色が流行りさう戦闘機百機購入決まる
 どこまでも供をする気の介助大ジョージ・ブッシュの棺を離れず
 先生がね遠くへ逝つたつてほんとかなだけどこかに隠れてゐるよ
 有り余る時間のあつたあの頃の雲はのどかに浮いてゐたつけ
 おほははの藍大島に照柿色の帯を締めゆく霜月の街
 年寄を重荷のやうに扱ふが湧いて出てきた訳にはあらぬ

超満員

東京 高橋登喜

大木からまり伸びし烏瓜十にはきかぬ赤き実を垂る
 学校の工事にテリトリ明け渡しハクセキレイが姿を消しぬ
 あこがれは土偶の豊かなお尻とぞ筋トレ教室の盛況に来つ
 届かなくなりて久しき棚の上近ごろ加えて屈むが出来ぬ
 嫁に来て墓をつくりぬ舅姑と義妹納めて夫も納まる
 「母のこと看取りてくれた娘さんは看る」と言いつつ義妹も逝く
 死後離婚こんな言葉をさきかじる婚家の墓は超満員で

不眠症

川崎 伊藤美恵子

お酢というものの名忘れますいものくださいと言う幼のお使い
 台風になぎ倒されしコスモスがもういちど立って十一月に咲く
 登校の子どもの声をかけられる「おはようございます」音の明るさ
 手作りの猫のブローチ貰いしがどう見てもうさぎ耳の長さは
 レンドルミン、アモバン、マイスリー名前だけ憶えて改善しない不眠症
 次男より車の中から見られつつ買物をする 腰は曲げない
 とくにして魔法使いになるわれか置いたばかりの鏡がもうない

たえながら

東京 坪裕

風神が怒れる如く日北風激しく吹き荒るるなり
 山一つ動き出さんか北風が激しく吹きつつ冬が近づく
 夜の底に静かに雪の降りだして村の全てが沈んでしまひぬ

ひと一人ようやく通れる雪道は4キロ先の町まで続く
 降る雪に沈んでしまつてどの家も暗い暮しが春まで続く
 降る雪にじつと堪えつたえながら辛抱強くなつてゆくなり
 稚子のやつめちゃめんこいと想つてた輝く夏の少年の頃

野水 仙 東京 朝香 ふさ枝

椿の花ほとりと落つる気配してポストに届く計報の葉書
 野水仙咲く岬への道すがら木札に薄るる牧水の歌
 つつましき花よと母が見上げいし枇杷の花咲く散歩の道に
 誰そ彼そつるべ落しに日の暮れて八手の花のほのかな明かり
 植木屋が躊躇なく剪る椿の枝ふくよかなりし蒼のありて
 天城嶺は雪になるらし伊豆にいて師走のさくら社に見仰ぐ
 こもれ日のうつろう庭に梅の花咲きて小鳥は山に帰らず

三日雨 倉敷 水本 美恵子

菩提寺の山の鉄塔に巢を作るミサゴが寺の鯉を食ふとぞ
 猪が身を浴びしあとの土くれをあちこちに見て寺の山ゆく
 低空のヘリの轟音にのければ雲のあはひの深き青空
 大ぶりの冬の苺をぶちぶちとつぶすときの間あたたかくをり
 日照時間みちかきこの頃蜜蜂がせはしく太らす冬の苺を
 瑞みずと椿が三つ上向きに落ちてしはすの三日雨なり
 蠟梅のかたき苔をつつかむとより来しヒヨが甲高く鳴く

作品二、三特選



(二月号作品から) 千々和 久幸 選

〈作品二〉

平成の母 柏 江口 絹代

母の家の少しひび割れし風呂桶を亀の子たわしでそろりと洗う
十五夜は雨で見えずと子報士が言えばカーテン開けて確かむ
病院の帰りに母はらつきようが食べたいと言いつれから黙す
よよよと傾きかけて母起立平成三十年を生きているなり
知らぬ間に本屋が消えてユザワヤになってしまった どうでもよいか
集音機を試しに耳に当ててみる房子さんの気持になつて
・ユーモラスな眼が捉えた、粒ぞろいの作品である。

弥次郎兵衛 藤 沢 牧 田 明 子

暑かつた季節はどこへ行きたるか信号機の赤ほんやりと待つ
現実と夢想のはざまの弥次郎兵衛どちらに転ぶもわたしはわたし
三十歳に逝きたる甥の笑む顔を夢にのこして暁を覚む
いただいた鉢の紅葉のしめり気を指に曳きつつ包みをほどく

意識戻らぬ夫の体が訴ふる「どうだこうなりや放つても置けまい」
数へたるあさがほの紺目にしみぬ喪主と呼ぶる静けさの中
・二首目の夫の訴えが、三首目で激変する無情。

平和な町 横 浜 西 文 枝

強風に傘がこわれてずぶ濡れになりたり気づけば誰も彼もが
夜明前すぎ家に入りて腹満たし大型トラック発ちてゆきたり
町長は「平和な町」を自慢せり確かにいつも代りばえせぬ町
・題名にもなった三首目のアイロニーが良い。

哀 歌 東 京 武 藤 昭 彦

半生を歌と抱きあい昇天す西沢みつぎ粋な生き様
ねずみ取りがスマートホンに気をとられ停止違反の吾を見のがす
「ほほカニ」と言う練りもの買つてみた ほほではなくてややではないか
・二、三首目、アイロニー混じりの軽いユーモアが持ち味。

シヨール 桐 生 水 谷 柳 子

マンドリン発表会に招かれて青葉城恋唄歌って帰る
羞して良し食べても良しとひとかかえ甥が持ち来るスプレー菊を
テキストのハンドメイドのシヨール纏む熱中してます五日で二枚
・軽妙な詠み口で、読者を愉ませる。

〈作品三〉

腕ふくらます 行 田 安 田 恵 子

朝一に髪ととのえる鏡中に今日のひと日の迷いがうつる

脳へと記憶をたどる様に似て紅葉のほそき幹を挽める
もみぢの緑をさなくあれば種子よりを育ててきたる人の指はも
・二首は面白いが、四、五首は構えた分だけ解り難い。

目 眩 福 岡 中 村 かよ子

耳なのか目なのか頭ふわふわと不動性目眩に浸りきる
違和感を伝える術の簡条書き又振り出しか今日ほどの医者
MRI、耳の検査に目の検査目眩の原因探して一万歩
医者の言う氣になくてもいいですよそれが出来ないから来たのです
目眩などなかった事と踏み出せど何だか地面がひたすら遠い
今やってみたきはハズキルーベなる眼鏡を尻で踏んでみることに
・特異な体験を作品化、ユーモラスな四首目、六首目が良い。

小さい影 さいたま 松 沢 みどり

歌会に来たら元氣になつちやつたわと言われて安心して四月
おどけつつまた瘦せたのよと言う肩の小さい影が夕陽に伸びる
我が子より軽い体にハグをして笑顔で別れた五月の終わり
会場の図書館が閉じ支部が閉じもう戻らない先生までも
できることしなかったことしなまま 一駅乗ればいつでも会えた
万一のときにと渡したケータイの番号メモは使われぬまま
・身近に接した故西沢道者への思いが籠もっている。

花の夕べに 鎌 倉 杉 山 ますゑ

にしん二尾の頭を落とし腸を抜き冷えびえとみる花の夕べに

風の手が布袋葵をゆるやかに寄せて水面に青空を呼ぶ
長年に客を迎えし十脚の椅子はあつさり買われてゆく
茶房より見えるダイソーブックオフ財布のひもが緩まるどころ
子のためと飛びきて濁るわれの血を蚊はしたたかに吸い腕ふくらます
・いずれも対象をよく見、しつかり表現している。

塩 害 千 葉 竹 本 幸 子

災害はあの手この手で襲い来る「塩害」という新たな脅威
塩害に電車はひと日止まりたり台風はどうに過ぎたるはずを
一日ぶりに動いた電車は塩害でビョウ柄となりホームに現わる
電子化の世の中となり消えゆくは紙と現金、コミユニケーション
・「塩害」をいち早く捉えた意欲を買う。

赤い羽根 逗 子 木 村 勲

木犀が銀河の如く散れる道標持つ手をしばし迷わず
それぞれの思いに星空仰ぎおり妻は今日を我は明日を
・破綻なく、手固く詠んでいる。

秋 日 和 横 浜 庄 司 健 造

幾重にも刈田の風はうつろいて一年なにをしてきたのやら
腰まわす頭まわさず肩まわす フラダンスいなゴルフのレッスン
・一首目の自省、二首目の結句の意外性に注目。

村野次郎への旅 (108)

「地上巡禮」と次郎 (一)

「香蘭」編集部の狭い書棚には、「香蘭」のバックナンバーと香蘭叢書の一部が保管されている。わたしがいま手にしているのは、「地上巡禮」の創刊号から第四号までの合本である。「地上巡禮」は全六冊の筈だが、手元には四号までしかない。常日頃、編集部に入入りしながら、この合本を手にしたのは今回が初めてである。

さてその創刊号(第巻巻第巻号)は発行日大正3年(1914年)9月1日。編輯兼発行者北原隆吉、発行所東京市麻布区坂下町十三番地、巡禮時社。毎月一回一日発行。本文50頁の他、北原白秋の「雲母集」の広告などが数頁にわたり、定価一部金貳拾五銭となっている。

本誌を手にした第一印象は、全頁に北原白秋の詩精神が漲っていると言え、今日のスマートフォンで整然たる歌誌の編集から見れば「こ

千々和 久 幸

た煮の、いかにも雑然たる感じである。今日の用紙事情や印刷技術の格段の進歩からすれば、そう見えてしまうのは致し方なからう。まず巻頭の「巡禮時社の言葉」から見ていこう。

常に敬虔なる地上巡禮の心を持って、われらは遙か悲しき向上の一路を辿らむとす。われらの振り鳴らす鈴の音は信樂最も深く、匂高くしてすずしく細やかに、到る處幽趣微韻の限りを盡さざる可らず。眞實に恐れ懼けなき驚き、純朴不二、内に無量の涙を湛え、外に飄渺の言葉を放つ、これわが念々祈願してやまざるところ、親しくわれらと行を同じうし共に眞珠の小徑を歩まむとする人は來れ。わがささやかなる正規は彌高く彌寂しきわれらが還路の門出に言葉なくして立てたるただ一つの道標なり。

いかにも白秋臭^{オキナク}芬^{フニ}たる名文である。「巡禮」という言葉が閃いた時、そのイメージの先に「振り鳴らす鈴の音」も「遙か悲しき向上の一路」も、「幽趣微韻」「眞珠の小徑」も一つの詩的体系として統合され、整然たる時の里程として起ち上がったものだろう。

ついでに巻末の8頁にわたる、白秋記と署名のある「社報」の一部を覗いておこう。「地上巡禮」の編輯が終了した。創刊號としては極めて手薄なものであるが、装幀印刷その他に就ては少くとも高品と美麗とを兼ねた殆ど單行本同様のものが出来上るらしい。兎に角私達は眞實で何處までも益界の貴族らしい權威と品格とを備へてゐなければいけない。自ら卑しくする人は他からも侮られる。私は少くとも本誌をして日本詩歌體最高の權威あるものにしたたい考へである。

「本誌をして日本詩歌體最高の權威あるものにしたたい」は、白秋の「地上巡禮」に寄せる昂然たる決意と信念を示したものである。

次いで目次を見よう。「巡禮時社の言葉」の

矢羽根姿

村野 次郎

後に白秋の「寸金」(警策)があり、斎藤茂吉「海濱」三原(歌)、室生犀星「向日葵の路」(詩)、萩原朔太郎「殺人事件」(詩)が続き、河野慎吾、古市あきらの歌の後に「矢羽根姿」(歌) 村野次郎とある。「巡禮」というにふさわしく、詩あり短歌あり評論もあったといった、白秋の詩才の幅広さの時、歌壇との交流の濃密さを思わせるものである。ちなみに朔太郎の「とほい空でびすとるが鳴る」で始まる「殺人事件」は、後に詩集『月に吹える』に収められた。短歌に目を転ずると、目次のこの位置からしても、河野慎吾、村野次郎は「地上巡禮」期待の新進であったことが解る。ちなみに次郎の年譜を見ておこう。

大正3年(1914)20歳 父、四十九歳にて没す。早稲田大学商学部入学。白秋の創立した「巡禮時社」に入会。麻布の巡禮時社にはじめて白秋を訪問する。

さて創刊号には五首が掲載されている。

父を埋むる日一首

- ① 矢羽根姿シルクハットに輝けば夕日かなしくめぐりやまずも
- ② 米つきがひねもす米を搗いて居りわがたへがたきゆふもやの中
- ③ 金松赤く輝け金松わが戀びとはかなしきものを
- ④ 鳳仙花赤きが戀ししげみより雉の出づる初夏の白光
- ⑤ 雑魚も來ぬ田甫の水につやけしの白き月居る昼の静寂

①の歌は、「香蘭」人にはお馴染みの作品である。これまで軽く読み流してきたが、いざ批評をしようとなると、これが意外に難しい作品であることが解る。

もしも「父を埋むる日」という詞書がなければ、若い男女の逢引きの歌と読んでもおかしくはない。それほどに洒落てロマンチックな雰囲気を感じさせる歌だからである。

だがまず初句の「矢羽根姿」が解らない。麦の一種類であることは見当がつくが、わたしが育った北九州では聞いたことがない。ついでシルクハット、当時の葬儀にはフロック

コートを着てシルクハットを被ることが礼装だったのか。ならばその人は葬儀委員長(喪主)か、会葬者の一人である村長か校長か、あるいはその土地に縁のある代議士か。

何せ村野家は府中の旧家で、当主は代々儀右衛門を名告るほどの名家である。今日では想像のつかぬ豪華な葬儀だったのだろう。さらに「かなしく」は、「愛しく」か「悲しく」か。逢引なら前者、葬儀なら後者となる。また詞書の「埋むる」は、文字通り土葬を意味すると読んでよいか。

とにあれ挽歌としては異色である。これが20歳の大学生であった村野次郎が遭遇した、父との感傷的な別れであった。なお矢羽姿については、ネット(デジタル大辞泉)にこうあった。

ヤバネムギ。オオムギで、三つの小穂のうち中央だけが結実して長い芒をもち、矢羽根形をなすもの。穎果が軸の両側につくので二条大麦ともいう。ビール醸造に用いる。

いずれにしろオオムギが夕日に輝き、シルクハットに反射していたのだろう。